会報　教育史学会　No. 138　2025. 11. 25

目　次

第69回大会を終えて
…… 鳥居　和代 …… 1

総会報告
　報告事項 …… 3
　審議事項 …… 5

第15回教育史学会研究奨励賞の授与 …… 9

コロキウム報告
（浮田真弓／香川せつ子／斉藤利彦） …… 10

大会参加記
（雨宮和輝／宇津野花陽／佐藤純子／新谷恭明／中村好甫／林潤平／劉　幸）
…… 15

代表理事退任にあたって …… 八鍬　友広 …… 20

「専門分野の自治」を守るために …… 駒込　　武 …… 20

第70回大会（2026年9月19～20日予定）のご案内 …… 天野　晴子 …… 21

『日本の教育史学』第68集における誤記のお詫びと訂正について …… 22

会員異動 …… 23

寄贈図書 …… 24

事務局からのお知らせ …… 25

第69回大会を終えて

教育史学会第69回大会は、９月27日（土）・28日（日）の２日間、金沢大学角間キャンパスにおいて現地開催されました。いささか暑さが残るなか、幸いにも大会期間中は天候に恵まれ、山の自然の清々しい空気に囲まれながら無事すべての日程を終えることができました。２日目の最後のコロキウムが終了し、参加者の方々が帰路についた後、金沢では雨が降り始めました。誰もいなくなった会場で、大会を終えた安堵感とともに、しばし余韻に浸っていたことを思い出します。

【大会参加・懇親会参加】

会員数減少に加え、金沢での地方大会であること、しかも市中心部から直線距離にして約５キロ離れた里山にキャンパスが位置し、交通アクセスも決して良好とはいえないことから、当初どのくらいの大会参加者数になるのか気がかりではありました。大会２日間、朝と晩に北陸鉄道の臨時バスをあわせて４便お願いし、バス時刻表を作成してなるべくご不便のないようにと努めたつもりですが、それでも心配は尽きませんでした。蓋を開けてみれば、大会当日は参加者193名（会員：一般会員148名、学生会員18名／非会員：臨時会員13名、臨時学生会員14名）と、想定外の200名近い方々のご参集がありました。受付でお渡しする物品や資料が足りなくなるかもしれないと別の意味での心配が生じたほどでした。JR金沢駅方面から路線バスに揺られてキャンパスに向かわれた方々がほとんどかと思われますが、タクシーや自家用車でお越しくださった方々もおられました。なお、金沢駅と小松空港に設置されたデジタルサイネージには、歓迎の意味を込めて今大会のご案内の掲示をお願いしました。お気づきでしたでしょうか。参加されたすべての皆さまに心より感謝申し上げます。

今大会では、2019年の第63回大会（静岡大学）を最後に不開催が続いていた懇親会を再開しました。その点では、総会での八鍬友広代表理事の言葉にありましたように、今大会は久々に「フルスペック」の大会となりました。１日目のシンポジウム終了後の懇親会には、これまた想定外の100名ものご参加がありました。なかでも、研究歴の若い学生会員・臨時学生会員の方々の占める割合が高かったことが印象的でした。懇親会の料理では、生協にお願いして金沢の郷土料理・治部煮（じぶに）を特別に提供していただきました。石川県の名酒や能登の酒など各種銘柄の地酒は大会準備委員会の方で調達しました。懇親会の場が大変和やかで、参加された皆さまに楽しんでいただけたことが何よりの喜びでした。

【研究発表・コロキウム】

今大会では、研究発表39件（うち発表辞退１件）、コロキウム３件と、前大会並みの申し込みがありました。分科会は９会場で、18名の会員の方々に司会をお願いしました（うち欠席１名）。各会場にはポータブルアンプとワイヤレスマイクを用意しました。大きなトラブルはなかったものの、当日は研究発表の資料が不足した分科会もありました。分科会場となった３部屋のうち２部屋では、教室の形状を考慮し、会開始前は教室前方のドアから入り、会開始後は教室側面の通路を通って後方のドアから出入りするかたちにしたため、資料置き場の位置をどうするか悩みました。資料置き場は教室外か教室内か、あるいは置き場を設けず学生スタッフが参加者一人ひとりに配付するか等、いろんな方法が考えられますが、いずれも一長一短あります。その他、電子媒体の発表資料をオンラインで事前に提出して大会参加者にダウンロードしてもらう方法もありえます。ただし公衆送信にあたるため、紙媒体の発表資料と同様かそれ以上に、発表者が引用や転載に際して著作権保護に留意する必要があり、また論文になる前の口頭発表の知見やデータが無断流用されやすくなるリスクも指摘されることから、一層慎重な扱いが求められます。今後の検討課題になると思われます。

【シンポジウム】

１日目午後の研究奨励賞授与式および総会終了後、「大学の教養教育の歴史―戦後大学史認識のために―」をテーマにシンポジウムを実施しました。大会会場となった建物の中で最も大きな部屋にたくさんの参加者が集いました。井上好人会員（金沢星稜大学）の報告は、戦後日本の大学における教養教育の前史にまつわる旧制高等学校の学生文化に焦点づけ、第四高等学校の雑誌部委員であった学生たちの精神性にみる語られない〈教養〉のリアルを浮かび上が

らせました。続く井上美香子会員（福岡女学院大学）の報告では、新制大学への一般教育導入のキーパーソンであったThomas H. McGrailが論じる一般教育と、大学設置基準の大綱化以後の審議会答申等にみる教養教育が、時代を超えて共通する力を学生に求めてきた点が指摘されました。さらに吉田文会員（早稲田大学）の報告では、日本・韓国・台湾の一般教育の比較を通して「構造的不協和」という独自の概念による東アジアモデルの特徴とその解消に向けた学生への教養教育の課題が示されました。そして三者の報告を受けて、指定討論者の飯吉弘子会員（大阪公立大学）からは戦後の産業界要求の変化やアメリカのリベラル教育再定義の動きなどを踏まえて、また田中智子会員（京都大学）からは旧制第三高等学校の事例や女性の教養・教養教育の視点から、密度の濃いコメントが提示されました。フロアからの議論も含めて、詳しくは今後発行される『日本の教育史学』掲載のシンポジウム記録をご覧いただければ幸いです。

【託児補助と自治体補助金】

今大会では、2011年の第55回大会（京都大学）、2012年の第56回大会（お茶の水女子大学）以来となる託児補助を実施しました。大会ウェブサイトの託児補助のチラシでご紹介した金沢市内の託児施設を利用された会員１名（子ども１名）に対し、大会準備委員会より託児費用の一部補助を行いました。託児所設置や託児費用補助などの方法の如何にかかわらず、また利用者の有無や多寡にかかわらず、学会に託児支援の仕組みがあること自体に意義があるとの認識は、大会準備委員会の委員間で共有されていたように思われます。

なお、今大会の開催にあたっては、石川県と金沢市よりコンベンション誘致推進事業補助金の交付決定を受けました。実績報告書の提出時に大会の実施風景写真が複数必要になることから、当日は会場の様子を写真撮影させていただきました。次期大会校の打診を内諾した段階で、自治体への補助金申請に向けて早めに準備を進めておく必要があり、書類作成など煩瑣な作業は増えますが、その分、大会運営費に余裕を持たせることができます。過去には第63回大会（静岡大学）においても、宿泊をともなう集客事業への自治体助成制度を活用した例がありました。とくに地方大会の開催ではこうした自治体補助金制度の活用を今後も積極的に視野に入れることが有効であるといえるかもしれません。

【その他】

前大会の手法を踏襲し、今大会でもプログラムや発表要綱集録の冊子体は作成せず、電子化を行いました。当日受付ではプログラムの一部のみ紙に印刷してお渡ししました。大会期間中はキャンパス内の食堂やコンビニエンスストア（ファミリーマートがあります）が休業で、キャンパス周辺の徒歩圏内にも飲食店が一切ないことから、希望者に昼食としてお弁当を手配した点についても前大会に倣いました。大会両日とも参加者から70個程度のお弁当の申し込みがあり、大会準備委員会やバイトスタッフ分を含めると１日で90個以上の発注になりました。

大会後のアンケートで寄せていただいたご意見については、実行委員間で共有しつつ、次の大会校にも適宜引き継ぎたいと思います。

最後に、今大会の準備・運営は、吉川卓治大会事務局長（名古屋大学・理事）、釜田史委員（愛知教育大学）、高野秀晴委員（仁愛大学）、橋本萌委員（信州大学）、土屋明広委員（金沢大学・非会員）の多大なるご尽力と、金沢大学のバイトスタッフ17名（学生・院生15名、事務補佐員２名）の協力なしには実行できませんでした。このようなメンバーと仕事を共にしながら、遠いキャンパスまで足を運んでくださった参加者の皆さまをお迎えできたことを嬉しく思っております。ありがとうございました。

第69回大会準備委員会
委員長　鳥居和代（金沢大学）

総 会 報 告

2025年９月27日（土）午後１時より開催された、第15回教育史学会研究奨励賞授与式に引続き、教育史学会第69回大会年度総会が、金沢大学角間キャンパス人間社会第二講義棟４階402講義室にて開催された。八鍬友広代表理事の挨拶、大会校代表鳥居和代会員の挨拶の後、議長団として天野晴子会員（日本女子大学）、鳥居和代会員（金沢大学）を選出した。審議事項はすべて原案通り承認された。出席者75名。

【代表理事挨拶】

教育史学会第69回大会にご参加いただきまして、まことにありがとうございます。大会をご準備いただきました、準備委員会の皆様に、深く感謝申し上げます。大会準備委員会は、開催校である金沢大学の鳥居和代委員長のほか、愛知県、福井県、長野県などの会員によって構成されているとお聞きしております。その意味では、広く中部地区の会員諸氏のご尽力を得まして、この大会が開催されているものと思います。それぞれ、大学業務も多忙化するなかで、ご尽力を賜りましたこと、重ねてお礼申し上げたいと存じます。

また、開催校をお引き受けいただきました、金沢大学には、会場提供のほか、さまざまなご配慮を賜りまして、まことにありがとうございます。あらためまして厚くお礼を申し上げさせていただきます。とくに今大会では、2019年以来となる、懇親会も開催されることとなりました。その意味では、フルスペックでの大会が、コロナ禍以後、はじめて再開されることとなったわけです。この点についても、開催校には、いろいろとご面倒をおかけしたものと思います。まことにありがとうございました。

さて、金沢大学で教育史学会が開催されますのは、1983年の第27回大会以来となります。当時から、すでに42年の時が過ぎたわけですが、この間、教員養成や大学の在り方が大きく変わったのみならず、社会全体の在り方も、大きく変貌を遂げました。このような変貌をどう認識するのかということも、教育史学のひとつのテーマかと思われます。今大会のシンポジウムは、「大学の教養教育の歴史」というタイトルになっておりますが、副題にもありますように、戦後の大学史に焦点があてられたものとなっているかと思います。戦後教育の変貌の本質に迫るシンポジウムとなることを期待したいと思います。

久しぶりのフルスペックの大会でありますので、会員諸氏の交流が大いに深まりますことを期待申し上げまして、私の挨拶とさせていただきます。

なお、最後になりますが、ひとことお詫びの言葉を述べさせていただきます。すでにお手元に『日本の教育史学』第68集が届いているかと思いますが、このなかで、図書紹介の図書の著者名に誤記が発見されました。著者名の誤記ですので、重く受け止める必要があるかと思います。詳細および訂正等の対応につきましては、のちほど、報告事項で編集委員長より報告したいと思いますが、この件につきまして、代表理事として深くお詫び申し上げたいと存じます。大変申し訳ございませんでした。

【報告事項】

１．第68回大会年度会務報告

小野事務局長より、以下の第68回大会年度会務報告があった。

⑴　会員異動（2024年９月１日～2025年８月31日）

年度当初会員数　689名、入会者24名、退会者46名（長期会費未納による退会者を含む）である。2025年８月31日現在の会員数667名である。

⑵　第68回大会の開催

2024年９月28日（土）・29日（日）に、東京学芸大学を会場校として、対面形式で開催した。参加者は総計204名（一般会員155名、学生会員19名、臨時会員10名、臨時学生会員20名）であった。

⑶　第68回大会年度総会の開催

2024年９月28日（土）午後１時より、総会に先立ち第14回教育史学会研究奨励賞の授与式が挙行された。その後、総会が開催され、代表理事、大会校代表、海外特別会員エックハルト・フックス氏による挨拶の後、議事に入り、機関誌編集委員の選挙結果報告、決算報告、予算・事業計画が審議され、承認された。総会出席者

は65名であった。

⑷　海外特別会員エックハルト・フックス氏による特別講演の実施

2024年９月30日（月）に早稲田大学を会場にして、“The Transnational in the History of Education”との演目で、エックハルト・フックス氏（海外特別会員）の特別講演会を教育史学会主催として実施した。

⑸　『会報』136号（2024年11月25日付）、『会報』137号（2025年５月25日付）を発行した。（発行数850）

⑹　機関誌第67集の J-Stage 登載

城島印刷に機関誌『日本の教育史学』第67集の登載を依頼した。事務局で内容確認を行った後、2025年５月１日に登載した。

⑺　国立大学教育評価委員会等専門委員の候補者推薦

教育史学会に対して、大学改革支援・学位授与機構から、国立大学教育評価委員会等の専門委員候補者推薦の依頼があった。代表理事・事務局で協議し会員の中から推薦を行った。

⑻　「日本学術会議法の廃案を求める教育史学会理事会声明」について

第68回大会年度第１回理事会の議決にもとづき、2025年３月27日付で「日本学術会議法の廃案を求める教育史学会理事会声明」を公表し、学会ホームページ、『会報』第137号に掲載するとともに、教育関連学会連絡協議会に報告した。

⑼　役員（理事・監査）選挙の実施

役員（理事・監査）選挙を、2025年６月13日に公示、７月14日投票締切、７月20日開票の日程で実施した。投票者数87名（投票率13.6％）であった。

⑽　代表理事・編集委員選挙の実施

代表理事・編集委員の選挙を、2025年８月６日に公示、８月19日投票締切、８月20日開票の日程で実施した。投票者数25名（投票率96.2％）であった。

⑾　『日本の教育史学』第68集の発行

2025年10月１日付で機関誌『日本の教育史学』第68集を発行した。発行部数は950部。

⑿　理事会の開催

第１回理事会　2025年３月27日（木）　Zoom ミーティングによるオンラインで実施

報告事項　会務報告／第68回大会決算報告／第69回大会準備状況／『日本の教育史学』第68集の編集経過／『日本の教育史学』第68集の書評・図書紹介の編集経過／国際交流委員会活動報告／70周年記念誌編集・出版の経過／教育関連学会連絡協議会について／その他

審議事項　日本学術会議法廃案を求める教育史学会理事会声明について／機関誌編集委員会正・副委員長選出について／書評委員の選出について／大会における研究発表およびコロキウム企画に関するガイドライン改訂について／会報の配布方法の変更について／第70回大会の開催校について／その他

第２回理事会　2025年９月22日（月）　Zoom ミーティングによるオンラインで実施

報告事項　第69回大会準備状況／会務報告役員選挙・編集委員選挙結果報告／『日本の教育史学』第68集の編集経過報告／研究奨励賞選考結果について／『日本の教育史学』第68集・69集書評委員会報告／国際交流委員会報告（国際交流委員長）／教育史学会創立70周年記念誌編集委員会報告／教育関連学会連絡協議会報告／寄贈図書報告／その他

審議事項　第68回大会年度決算（案）及び監査報告／第69回大会年度事業計画・予算（案）／編集委員選出（第69・70集担当）／次期大会校について／入会・退会者について／その他（総会の運営について・研究奨励賞授与式について）

２．役員（理事・監査）選挙結果報告

高瀬幸恵選挙管理委員より、以下の報告があった。役員（理事・監査）選挙を2025年６月13日に公示、７月14日投票締切、機関誌編集委員選挙を７月20日開票の日程で実施し、次期理事確定後、2025年８月６日に公示、８月19日投票締切、８月20日開票の日程で実施した。選挙結果は以下の通りである。

■代表理事　　駒込　武

■理事

一見　真理子　東洋　（お茶の水女子大・研究員）
岩下　誠　　西洋　（青山学院大学）
江口　潔　　一般　（九州大学）
大島　宏　　日本　（東海大学）

小野　雅章　　日本　（日本大学）
川村　肇　　日本　（獨協大学）
木村　元　　日本　（青山学院大学）
木村　政伸　　日本　（西南女学院大学）
小玉　亮子　　西洋　（お茶の水女子大学）
駒込　武　　一般　（京都大学）
坂本　紀子　　日本　（聖徳大学）
三時　眞貴子　西洋　（広島大学）
白石　崇人　　日本　（広島大学）
白水　浩信　　西洋　（北海道大学）
新保　敦子　　東洋　（早稲田大学）
須田　将司　　日本　（学習院大学）
田中　智子　　日本　（京都大学）
鳥居　和代　　日本　（金沢大学）
奈須　恵子　　日本　（立教大学）
野々村　淑子　西洋　（上智大学）
樋浦　郷子　　一般　（国立歴史民俗博物館）
八鍬　友広　　日本　（放送大学）
山田　恵吾　　日本　（埼玉大学）
湯川　嘉津美　日本　（上智大学・名誉）
吉川　卓治　　日本　（名古屋大学）
米田　俊彦　　日本　（お茶の水女子大学・名誉）

■監査
池田　雅則　　日本　（兵庫県立大学）
宮坂　朋幸　　日本　（大阪商業大学）

■機関誌編集委員（第69・70集）
池田　雅則　　日本　（兵庫県立大学）
木村　元　　日本　（青山学院大学）
神代　健彦　　日本　（京都教育大学）
湯川　嘉津美　日本　（上智大学・名誉）
日暮　トモ子　東洋　（日本大学）
山本　和行　　東洋　（天理大学）
岩下　誠　　西洋　（青山学院大学）
三時　眞貴子　西洋　（広島大学）
樋浦　郷子　　一般　（国立歴史民俗博物館）

この他、「機関誌編集委員会規程」第２条による、「理事会の互選により選出される委員」として、奈須恵子会員（立教大学）が日本の領域の編集委員として加わる。

３．『日本の教育史学』第68集の刊行について

坂本紀子機関誌編集委員長より、『日本の教育史学』第68集が、2025年10月付で発行されたとの報告があった。（発行部数950部）なお、目次および本文に氏名に関する誤記があったことについての陳謝、およびその訂正については、会報、HP、J-Stage 登載時においてそれぞれ行う旨の報告があり、承認された。

４．国際交流委員会報告

川村肇国際交流委員長より、①海外特別会員、②国際教育史学会、③『日本の教育史学』第69集の「海外研究情報」への寄稿、④今後の活動についての報告があった。

５．創立70周年記念誌編集委員会報告

米田俊彦創立70周年記念誌編集委員長より、記念誌の内容、今後の予定が報告された。あわせて、記念誌は、会員に１部配布（配布対象は、第69回大会会費を2026年４月末までに納入した会員）することも合わせて報告された。

【審議事項】

１．第68回大会年度決算報告

小野事務局長より、第68回大会年度の決算報告が行われた。

２．第68回大会年度監査報告

軽部勝一郎監査より、９月14日に日本大学文理学部教育学研究室で、第68回大会年度の監査を実施し、収支決算、および資産管理が適切に行われていることを確認した旨の報告があり、本件は承認された。

３．第69回大会年度予算案について

小野雅章事務局長より、資料にもとづき、第69回大会年度の予算案の説明があった。編集費、事務局経費とも、対面の委員会を確保するための予算を計上したこと、また、役員選挙実施の大会年度に当たるため、事務局経費についてはその分、通常よりも多くの予算を計上していること、70周年記念誌関係の予算を組んだ旨の補足説明があった。本件は、異議なく承認された。

４．第70回大会校について

八鍬代表理事より、第70回大会を日本女子大学で天野晴子会員を大会準備委員長として開催したい旨の提案があり、異議なく承認された。

議事終了後、次期大会校を代表して、天野晴子会員より挨拶があり、総会は終了した。

第68回大会年度決算報告

収支計算書（2024. 9. 1～2025. 8. 31）

収入

単位：円

費目		予算	決算	差額	備考
会費	68回年度個人会費	4,238,500	4,076,000	162,500	7000*564名、4000*32名　納入率80.2%
	69回年度個人会費	0	14,000	-14,000	7000*2名
	過年度個人会費	650,000	574,000	76,000	7000*78名、4000＊7名　予算比88.3%
	小計	4,888,500	4,664,000	224,500	
機関誌等販売収入	機関誌販売収入	264,600	245,245	19,355	91冊
	ブックレット販売収入	0	10,815	-10,815	
	小計	264,600	256,060	8,540	
雑収入	受取利息	30	910	-880	ゆうちょ・みずほ・編集委員会口座利息
	小計	30	910	-880	
当年度収入合計　A		5,153,130	4,920,970	232,160	
前年度繰越金　B		6,246,305	6,246,305	0	
収入総計　C＝A＋B		11,399,435	11,167,275	232,160	

支出

単位：円

費目		予算	決算	差額	備考
大会費	大会運営費	1,200,000	1,146,579	53,421	第68回大会（東京学芸大学）、ドメイン料
編集費	機関誌刊行費	748,000	748,000	0	第67集印刷費（950部）
	電子ジャーナル公開関連費	105,820	105,820	0	67集 J-STAGE 登載費
	編集複写費	10,000	850	9,150	
	編集交通費	300,000	0	300,000	
	編集通信費	10,000	9,040	960	
	編集消耗品費	15,000	0	15,000	
	編集謝金	60,000	60,000	0	
	編集人件費	250,000	250,000	0	編集幹事謝金200,000、幹事経費50,000
	編集雑費	20,000	26,400	-6,400	Dropbox 利用料
	書評等原稿謝金	15,000	0	15,000	
	書評用図書購入費	70,000	70,000	0	書評委員　@10,000
	振込手数料	2,000	1,320	680	
	小計	1,605,820	1,271,430	334,390	
事務局経費	人件費	1,000,000	882,020	117,980	嘱託70,000*12ヶ月、交通費、アルバイト費用
	旅費交通費	300,000	30,326	269,674	監査交通費、選挙管理委員交通費
	奨励賞関係費	100,000	100,000	0	奨励賞副賞50,000*2
	通信運搬費	550,000	545,076	4,924	会報・機関誌・選挙書類発送費、ゆうちょ Biz 利用料
	消耗品費	20,000	9,463	10,537	事務用品等
	印刷製本費	300,000	368,280	-68,280	会報・役員選挙
	手数料	15,000	11,200	3,800	振込手数料学会負担分
	ＨＰ管理運営費	45,000	50,386	-5,386	サーバー年間利用料、ドメイン更新費
	資料保管費	130,000	143,165	-13,165	トランクルーム代
	名簿発行費	0	0	0	
	小計	2,460,000	2,139,916	320,084	
国際化促進関係費	謝金	50,000	50,000	0	翻訳謝金
	国際学会関連費	20,000	17,061	2,939	国際教育史学会年会費（100ユーロ）
	若手会員海外学会派遣費	100,000	0	100,000	
	国際学会シンポジウム費	0	0	0	国際教育史学会シンポジウム参加費補助
	海外特別会員講演謝金	30,000	35,000	-5,000	フックス先生30,000、アテンドアルバイト5,000
	通信運搬費	15,000	19,170	-4,170	海外ナショナルライブラリ―への機関誌送付費
	小計	215,000	121,231	93,769	
雑支出	雑支出	10,000	15,000	-5,000	教育関連学会連絡協議会会費、24年度分10,000、25年度分5,000
予備費	予備費	50,000	10,000	40,000	70周年記念誌執筆謝金（図書購入費）
当年度支出合計　D		5,540,820	4,704,156	836,664	
当年度収支差額　A－D		-387,690	216,814	-604,504	
次年度繰越金Ｅ＝Ｃ－Ｄ		5,858,615	6,463,119	-604,504	
支出総計　D＋E		11,399,435	11,167,275	232,160	

貸借対照表（2025. 8. 31現在）

資産

単位：円

費目		金額	備考
現金	現金	8, 355	
預金	郵便振替口座	4, 497, 540	
	ゆうちょ銀行	191, 504	
	ゆうちょ銀行定額貯金	5, 000, 000	
	みずほ銀行	331, 535	
	小計	10, 020, 579	
仮払金	大会費	1, 200, 000	第69回大会（金沢大学）
	小計	1, 200, 000	
前払金	資料保管費	11, 495	トランクルーム9月分
未収金	編集費精算返金	334, 710	翌期9月に振込
資産総計　F		11, 575, 139	

負債・積立金および繰越金

単位：円

費目		金額	備考
前受金	会費	105, 000	第69回大会年度会費
積立金	将来計画積立金	5, 000, 000	ゆうちょ銀行定額貯金
元入金		3, 520	前年度繰越額
預り金		3, 500	前年度繰越額（不明入金）
負債・積立金合計　G		5, 112, 020	
第68回大会年度への繰越金　H＝F－G		6, 463, 119	
負債・積立金・繰越金総計　G＋H		11, 575, 139	

会計監査報告

第68回大会年度会計につき監査を実施し、収支決算および資産管理が適切になされていることを確認しました。

2025年９月５日

監査　　大島　　宏　　㊞

監査　　軽部勝一郎　　㊞

第69回大会年度予算（案）

収入

単位：円

費目		予算	68回決算	備考
会費	69回年度個人会費	4,130,000	4,090,000	7000*570、4000*35
	過年度個人会費	600,000	574,000	7000*80、4000*10
	小計	4,730,000	4,664,000	
機関誌等販売収入	機関誌販売収入	264,600	245,245	68回（91冊）
	周年記念誌販売収入	0	0	
	ブックレット印税収入	0	10,815	
	小計	264,600	256,060	
雑収入	受取利息	910	910	普通預金利息
	小計	910	910	
当年度収入合計　A		4,995,510	4,920,970	
前年度繰越金　B		6,463,119	6,246,305	
収入総計　C＝A＋B		11,458,629	11,167,275	

支出

単位：円

費目		予算	68回決算	備考
大会費	大会運営費	1,200,000	1,146,579	第68回大会（東京学芸大学） 大会用レンタルサーバー料
編集費	機関誌刊行費	750,000	748,000	第67集印刷費（950部）＋消費税
	電子ジャーナル公開関連費	105,820	105,820	67集 J-STAGE 登載費96,200+ 消費税
	編集複写費	10,000	850	
	編集交通費	50,000	0	
	編集通信費	15,000	9,040	
	編集消耗品費	5,000	0	
	編集謝金	60,000	60,000	
	編集人件費	250,000	250,000	編集幹事謝金200,000、幹事経費50,000
	編集雑費	27,000	26,400	
	書評等原稿謝金	20,000		非会員謝礼　@5,000
	書評用図書購入費	70,000	70,000	書評委員　@10,000
	振込手数料	2,000	1,320	
	小計	1,364,820	1,271,430	
事務局経費	人件費	950,000	882,020	嘱託70,000*12ヶ月、交通費、アルバイト費用
	旅費交通費	150,000	30,326	監査交通費、選挙管理委員交通費
	奨励賞関係費	150,000	100,000	奨励賞副賞50,000*2
	通信運搬費	450,000	545,076	会報・機関誌・選挙書類発送費、ゆうちょ Biz 利用料
	消耗品費	20,000	9,463	事務用品等
	印刷製本費	350,000	368,280	会報・役員選挙
	手数料	15,000	11,200	振込手数料学会負担分
	ＨＰ管理運営費	50,000	50,386	サーバー年間利用料、ドメイン更新費
	資料保管費	145,000	143,165	トランクルーム代
	名簿発行費		0	
	小計	2,280,000	2,139,916	
国際化促進関係費	謝金	100,000	50,000	翻訳謝金
	国際学会関連費	20,000	17,061	国際教育史学会年会費（100ユーロ）他
	若手会員海外学会派遣費	100,000	0	
	国際学会シンポジウム費		0	国際教育史学会シンポジウム参加費補助
	海外特別会員講演謝金		35,000	フックス先生30,000、アテンドアルバイト5,000
	通信運搬費	20,000	19,170	海外ナショナルライブラリーへの機関誌送付費
	小計	240,000	121,231	
70周年記念誌関係	記念誌出版費（含送料）	1,590,000	0	印刷費1,450,000　送料140,000
雑支出	雑支出	5,000	15,000	教育関連学会連絡協議会会費、24年度分10,000、25年度分5,000
予備費	予備費	30,000	10,000	70周年記念誌執筆謝金（図書購入費）
当年度支出合計　D		6,709,820	4,704,156	
当年度収支差額　A－D		-1,714,310	216,814	
次年度繰越金Ｅ＝Ｃ－Ｄ		4,748,809	6,463,119	
支出総計　Ｄ＋Ｅ		11,458,629	11,167,275	

第15回教育史学会奨励賞の授与

授賞対象者：大隈　　楽
授賞対象論文：「学生思想問題」への京都帝国大学の対応と大学自治
―学生懲戒処分と学生主事制度に着目して―

選　定　理　由：本論文は戦前の高等教育機関における「学生思想問題」への対応について、京都帝国大学を事例として考察したものである。先行研究を綿密に検討した上で関連史料を丹念に収集・検討し、京都帝国大学の「学生思想問題」における学生懲戒処分への対応の実態を描き出すことに成功している。大学自治の諸局面を浮き彫りにするだけでなく、滝川幸辰の大学自治論、学問研究論を浮かび上がらせていることと相まって、高等教育史研究、「思想問題」研究に新たな一面を加えうる完成度の高い論文と評価できる。よって選考委員会は、本論文が研究奨励賞を授与するに値しうる論文であると判断した。

授賞対象者：下口　　円
授賞対象論文：共同生活兄弟会における修練（exercitium）
―G・ツェルボルト・ファン・ズトフェン（1367-98）の二書を中心に―

選　定　理　由：本論文は、中世から近代への転換期に、共同生活兄弟会が学寮および学校で実施　した教育活動を、「修練」という観点から、テキストやラピアリウム（学習ノート）などを具体的に分析して、それらが近代の学校教育に継承されていることを実証している。同時に、中世末のデヴォチオ・モデルナ（信仰刷新運動）から発生した「修練」が、「終わりなき進歩」を目指すことで、近代教育へとつながっていった論理を解明している。堅実であると同時に、近代教育の根本理念の再考を迫る意欲的な論考である。よって選考委員会は、本論文が研究奨励賞を授与するに値しうる論文であると判断した。

授賞対象者：秋永　沙穂
授賞対象論文：第三共和政期ボルドーにおける女子リセ（Lycée Camille-Jullian, 1883～）の設立過程

選　定　理　由：本論文は、第三共和政期のボルドーにおいて女子リセーが開校されるまでの経緯を、開校場所、通学手段、教師の選任、生徒募集、などの具体的な事実をひとつひとつ検証し、女子リセーが地域社会で受け入れられていった背景と過程を丁寧に描き出している。国家と学校と地域の複雑な関係を解明するための緻密で、手堅い研究であり、かつ、ジェンダーの問題、国家と地域の関係を解き明かすための基礎となる貴重な研究である。よって選考委員会は、本論文が研究奨励賞を授与するに値しうる論文であると判断した。

コロキウム報告

「専検」の研究—制度・学力・メディア—

企画者　浮田　真弓（岡山大学）

司　会　三上　敦史（早稲田大学）

報告者　堀之内敏恵（仙台青葉学院短期大学）
白岩　伸也（北海道教育大学）
浮田　真弓（岡山大学）
三木　一司（近畿大学九州短期大学）

「中等教育に求められた教育水準の歴史的研究：専検（専門学校入学者検定）を通して」（JSPS 科研費基盤研究（B）23H00929　23K25626）の中間発表を行うため、本コロキウムを企画した。研究メンバーはこれまで専検のうち試験検定に関して、調査研究を進めてきた。制度に関しては堀之内会員、学力に関しては白岩会員、浮田会員、メディアに関しては三木会員が報告した。以下、報告者による概要を記す。

堀之内報告「専検試験検定の整備過程—各府県における細則等の比較から—」

本報告では、1903年に制定された「専門学校入学者検定規程」から1924年の制度改正までの間に、各府県が専検試験検定を実施するための制度をどのように整備したのかを、37府県における細則等の史料をもとに検討した。その結果、試験検定は全国的な制度枠組みの下に位置づけられながらも、実際の運用は各府県の裁量に大きく委ねられていたことが明らかとなった。細則等の制定時期・形式・内容には顕著な地域差がみられ、制度の定着過程には各府県独自の判断や事情が強く反映されていたことが確認された。こうした府県の裁量の存在は、近代教育制度の地域的展開を具体的に検討するうえで重要な視点を提供する。他方で、このような地方的展開は教育機会の拡大に寄与する一方、運用上の差異や不均衡をもたらし、最終的に1924年に試験検定の実施主体が文部省へ移管される一因となった可能性が示唆された。

白岩報告「専検体操科の試験問題とその対策について」

体操科は、身体の規律化を図る学校システムで中心的な役割を担ったが、それをめぐる学校段階ごとの関係は知られておらず、中等教育段階については、検討の余地がある。本報告では、中学校卒業程度の「学力」を評価する専検体操科について、試験問題と試験対策に焦点づけて検討し、その教育史的意味を考察した。専検体操科をめぐる動向は、全国統一の「学力」水準を排他的に設定し、それにもとづいて客観的に評価することの不可能性を示していた。とくに試験問題が全国で統一されてから、中学校体操科との間に距離が生じ、試験制度は隘路に陥ったため、対策においても中学校卒業程度の運動能力は閑却されている。むしろ態度などの抽象的な能力が求められ、人物試験としての性格が強まっていく。その帰結として、存在意義が否定される余地が生じ、1935年に試験科目から除かれたのである。以上の展開を水路づけたと考えられる、問題統一前の実態や他の試験検定との関係は今後の課題とした。

浮田報告「専検国語科の統一試験問題で試されていたもの」

本報告では全国統一以後の試験問題の出典調査を中心に報告する。統一前の試験問題に関しては確認できる資料では実施府県が不明である上に、問題構成が年によってまちまちであり、経時的変化を追いにくい。

統一後の1924年から1943（昭和18）年までの問題構成は解釈問題三問、文法一問、書き取り一問、作文一問となっている。解釈問題の出典を調査した結果、中世以降の随筆・評論が出題されている。中古と中世の間にひかれていた「国語」と「古文」の間の線引きが江戸時代と明治に引かれるようになったのは1920年代のことである。しかし、専検国語の解釈問題では中古文の出題は三問にとどまっており、文体も文語文、普通文が中心で口語文は「国体の本義」「臣民の道」などだった。文学的な内容や古典常識を問われることはなく、文語文を口語文に書き換え、難語を書き換えることと中世以降の学問論、処世訓、日本史、忠君愛国の理解などが試験で試されたものだった。

三木報告「『新国民』に見る学習者コミュニティー—合格体験記、支部会を手がかりに—」

本報告は雑誌『新国民』に所載された専検合格体験記や支部及び誌友会を手がかりとして、伝えられた受験情報や誌友会などの活動内容を検討した。『新国民』は大日本国民中学会の通信教育の機関誌とし

て毎月１冊が会員に配布された。

合格体験記には専検受験を決意してから合格するまでの歩みと受験科目の難易、学習方法、参考書などが詳細に記され、ある程度共通した受験の情報を垣間見ることができた。会員や会友の交流は支部会や誌友会というかたちで行われていた。支部は主に町村単位で設立し、会員勧誘や中学校設立、講演会などを主催していた。誌友会は幅広い会員と会友が参加し、講演会、受験報告、茶話会、余興などを行い、その協議では大日本国民中学会への要望も出されたりしていた。体験記の内容や誌友会での活動から、会員同志のつながりの一端を知ることができた。今後は受験体験記に共有された学習の情報を併せて検討すること、支部会活動のさらなる実際を明らかにすることが課題として残された。

総括討論では、他資格への適用、出題の意図、他の資格試験との関係、合格後のキャリアなど、各報告への具体的な質問が寄せられ、今後の研究可能性も含め応答された。

中等教育の水準を明らかにすることが目指された共同研究であったが、問題の分析を進める中で「学力」とは何かという根源的な問いも生まれた。加えてメディア研究による独学者のコミュニティ研究によって学校外の「学力」形成を明らかにすることができる。

これまでは、いわゆる男子専検が検討対象となっているが、女子専検、外地専検などの調査もすすめる予定である。同時に、やみくもに検討対象の教科を増やすことはいましめなければならないが、現在、研究チームでは数学、修身の検討も準備中である。ジェンダー規範や植民地主義を視野に入れながら、中学校卒業程度の「学力」を学科目横断的に検討・考察するものであり、その意味ではまさに中等教育とは何かを内容に即しながら総合的・多面的に問う研究となる。

本企画の運営を支えてくださった大会実行委員会のみなさまにお礼申し上げます。

本研究はJSPS科研費「中等教育に求められた教育水準の歴史的研究：専検（専門学校入学者検定）を通して」（基盤研究（B）23H00929　23K25626）の助成を受けたものである。

トランスナショナルな教育史の挑戦と可能性
―トランスナショナルな教育史は、一国単位の教育史をどう書き換えるのか―

オーガナイザー：香川せつ子（津田塾大学）

報告者：香川せつ子（津田塾大学）
中込さやか（立教大学）
内山（小澤）由理（共立女子大学）

指定討論者：岩下　　誠（青山学院大学）
並河　葉子（神戸市外国語大学）

本コロキウムでは、「〈教育の革新〉に関するトランスナショナルな教育史の構築―日英米の循環」（JSPS科学研究費基盤研究（B）21H00824:23K20678）の成果として、今年６月に刊行された *Women and Educational Reform in History: Japan in a Transnational World*（edited by Joyce Goodman and Setsuko Kagawa, Routledge, 2025）をベースに、トランスナショナルな視点に立つ教育史の特徴と方法を提示し、今後の教育史研究における可能性と課題について論議した。

トランスナショナルな教育史は、1990年代以降の欧米の歴史学研究におけるグローバル・ヒストリーの潮流の一角をなす。その主眼は欧米中心主義の克服にあり、帝国の支配下に置かれた旧植民地やアジア、アフリカなど「周縁」とされてきた地域の視点からの世界史叙述を促した。こうした動向は教育史研究に波及し、ISCHE（国際教育史学会）、HES（イギリス教育史学会）等においても欧米以外の研究テーマ、研究者の参加が著しい。トランスナショナルな教育史は、国家間の教育交渉や教育制度を比較検討する国際理解教育や比較教育とも一線を画する。その主な関心は、「ある一国で成立した教育制度の他国における受容と展開」よりも、「ある国や地域で生成した教育の思想や制度が、人やモノの移動・移転を通して他国の文化や慣習と交差する過程での衝突と変容と混交の様態」にある。日本の伝統的教育史は、著名な教育思想家や教育家、教育制度とその立案者に焦点を当ててきた。トランスナショナルな教育史においては、表舞台に登場することが少なかった個人や団体の活動や繋がりに注目する。*Women and Educational Reform in History: Japan in a Transnational World* は、日米英の女性教育者をとりあげ、彼女たちの国境を越えた移動と日本の教育改革への関与を解明したトランスナショナルな教育史への挑戦的著作である。本コロキウムは、同著の編者 Joyce

Goodman 教授の本年１月のご逝去を悼むとともに、日本においてジェンダーとトランスナショナルな教育史を発展させていくことの意義と課題を明らかにすることを目的に企画された。

香川報告：戦前期における女性教育者のトランスナショナルな移動

明治以降の女子教育は女性宣教師の学校設立を通したキリスト教文化の移入に始まり、政府の国家主義的政策との絡み合いのなかで変遷と拡大を遂げた。神戸女学院におけるアメリカへの留学奨励はトランスナショナルなキリスト教ネットワークの環に日本の女子教育を組み込んだ一例である。教育勅語（1890）と国家による女子教育の推進策（1890女子高等師範学校設立、1899高等女学校令）を境にミッション・スクールと官公立女学校の勢力図は一転する。国力増強の基盤として女子教育の強化を図る明治政府は、女子高等師範学校の教師を継続的に欧米諸国に留学させた。1896年の安井てつを筆頭に17人の教師が英米独に派遣され、西洋の科学的知識と教育法を帰国後の女子教員養成に反映し、近代的良妻賢母教育の普及に貢献した。他方で1900年以降、アメリカ留学経験のある津田梅子、成瀬仁蔵によって設立された女子英学塾、日本女子大学校は、卒業生の留学を通してアメリカの女子大学とのネットワークを構築し、第二次世界大戦後の高等教育改革を牽引するリーダーを輩出した。

中込報告：明治・大正期の英国留学と家政学からみるトランスナショナルな「文化の転移」

明治・大正期の日英におけるトランスナショナルな「文化の転移（cultural transfer）」を明らかにするため、「文化の転移」の媒介者（intermediaries）である大江（宮川）スミ（1875～1948）の英国留学に焦点をあて、大江は媒介者としてどのようなトランスナショナルな経験をし、家政学に着目して近代的な日本女子教育を再構築することでいかに日本の国民国家の形成に貢献しようとしたのかを分析した。大江は東洋英和女学校と女子高等師範学校で学び、卒業後に沖縄で教鞭をとった（1901～02）後にイギリス留学（1902～06）を経験した。帰国後は東京女子高等師範学校の家事科教授をつとめ、後に東京家政学院を創設（1925）した。大江はトランスナショナルな教育経験と教職経験を重ねるごとに異なる地理的・文化的・社会的・政治的な空間を移動し、その置かれた地位や役割が変化した。大江が目指した家政学は、西洋と日本の知識・技能・徳を融合させた家庭管理の理論と実践に焦点を当てて包括的な教養教育を行うことを通じて、近代化する「世界の中の日本」の主婦・母親を育てることを目指した。大江のトランスナショナルな経験は近代国民国家の構築に近代的女子教育と家政学を通じて貢献すると同時に、ナショナリズムや帝国主義の強化に繋がっており、entangled history の一例を示す。

内山（小澤）報告：明治・大正期保育者の米国留学を通したトランスナショナルな経験

明治・大正期に日本とアメリカの幼稚園運動の懸け橋となった女性宣教師の一時休暇（Furlough）における海外留学を取り上げ、女性保育者による日本とアメリカのネットワークの形成を分析した。具体的にはシカゴ幼稚園カレッジに学んだ女性宣教師に注目し、留学のネットワークがインフォーマルな個人的なつながり（校長との個人的な関係、又は同校の卒業生）から始まり、やがて日本幼稚園連盟（Japan Kindergarten Union）に所属する女性宣教師たちが次々と訪れたことで日米間のトランスナショナルなネットワークが発展した経緯を示した。この循環に参入できたのはメソジスト系教会の保母養成所の女性宣教師と後継者とされた少数の日本人保育者に限られたが、シカゴ幼稚園カレッジ側からの「遠いアジアでの宣教への尊敬の念」「国際協調」に基づいた留学生の受け入れは両国相互の国際的な保育者の育成に貢献した。本報告は保育の国際交流を経験した留学生たちが、日本へ戻った後に同校とは熱心な書簡交流を続けたことにも注目し、互いの近況や保育の様子、国際的な政治状況への意見を伝える書簡のやり取りを通じて、留学のネットワークが国境・宗派・人種を越えた幼児教育と保母養成に携わる女性たちによるトランスナショナルな連帯を創出していく様子を示した。

以上の報告を受けて、岩下誠がアングロ世界における教育のトランスナショナルな伝播を植民地化とイギリス人意識を通じて考える視座から、並河葉子が近代教育のトランスナショナルな転移と移殖をミッション史研究の視点から、報告へのコメントを付し、検討課題を提示した。

岩下は①トランスナショナルな経験は女子教育のパイオニアたちの思想や概念の変容をもたらしたのか、②階級や政治、権力の非対称性はとトランスナショナル（グローバル）ヒストリーのどこに位置づ

くのか、という疑問を提起した。さらにStephen Jacksonによるカナダ、オーストラリア自治領の国民国家への変容に関する一連の研究を紹介することにより、新自由主義・新帝国主義に回収されない教育のトランスナショナル・ヒストリーの可能性を提示した。もう一つの論点はAlexander Kiossevが提示した「自己植民地化self-colonization」という概念であり、女性教育者のトランスナショナルな教育実践を、「実際には侵略され植民地化されることなく、ヨーロッパと西欧の文化的パワーに屈する」という軸で語りなおした時、どのような解釈や構造が示されうるかの問いかけに対して、各報告者から個別事例に即しての応答があった。

並河は、女性宣教師の日本での教育活動は、欧米発のキリスト教ミッション・ネットワークのグローバルな展開の一環として、19世紀後半に徐々に形成されたフェミニスト・ネットワークとの関係性においても検討する必要があることを提起した。ミッション・スクールは女性宣教師が地域社会との接点を形成するための装置としてとらえられ、西洋発祥の近代的な家族モデルを通して社会を「文明化」する使命と、保護者のニーズに応じたカリキュラムの現地化とのバランスの必要に晒されていたことが指摘された。

会場には、欧米、アジア、日本を研究対象国とする、ベテランから若手院生まで約20人の参加者があり、トランスナショナルな教育史への関心の増大を実感した。フロアからの質問は、国境を越えた人やモノの移動に伴う教育思想や実践の交差や混交、絡み合いのプロセスの分析方法や、指定討論者によって提起されたトランスナショナルな教育史の陥穽など、重要な論点をつくものであった。また女性教育者や保育者の教育活動をトランスナショナルな文脈において検討することで開かれる新たな視界など、今後の発展の可能性も示された。司会の不手際で終了予定時間を20分オーバーしてしまった。遅くまで論議に参加していただいた会員の皆様、温かいご配慮を頂いた大会実行委員会の皆様に感謝申し上げます。

＊１～３の報告は、それぞれJSPS科学研究費25K05844, 24K05727, 24K05643の補助金によるものです。

「学校日誌」に見る戦争と墨塗られた記述

オルガナイザー：斉藤　利彦（学習院大学・名）

報告者：逸見　勝亮（北海道大学・名）
森川　輝紀（埼玉大学・名）
前田　一男（立教大学・名）
梅野　正信（学習院大学）
板橋　孝幸（奈良教育大学）
須田　将司（学習院大学）
池田　雅則（兵庫県立大学）
森田　智幸（山形大学）

指定討論者：小野　雅章（日本大学）

本コロキウムは、「『学校日誌』に見る戦争と墨塗られた記述」というテーマの下に、研究プロジェクトの９名のメンバーによる構成の下に報告を行った。当日は50名を超える参加者があり、７つの報告と指定討論者によるコメント、そして質疑応答が交わされた。

本研究プロジェクトは、これまでのところ28都道府県と台湾で、116の国民学校、青年学校、旧制中学校、高等女学校、旧制高等学校等の戦時下の「学校日誌」（校務日誌、教務日誌、宿直日誌、職員会誌を含む）を見い出し、閲覧と調査を行ってきた。

その中で、まずは、「学校日誌」に見る戦時下の日常として、以下の14の事象に着眼し検討を行ってきた。①御真影の奉護、②軍人の出征見送りと戦没者の英霊出迎え、③空襲警報の多発と被害、④軍隊の学校校舎への駐屯と「兵営化」、⑤校長訓話、⑥勤労動員、⑦学徒隊の結成と訓練、⑧特攻隊の顕彰と感謝、⑨国民義勇隊の訓練、⑩陸海軍少年兵募集方策の展開、⑪満蒙開拓青少年義勇軍の召募、⑫国策映画と学校における利用、⑬戦時期台湾の国民学校「学校日誌」と戦時教育の諸相、⑭8.15の記述：敗戦をどう受けとめたのか。

さらには、「学校日誌」の墨塗り、いわゆる「墨塗り学校日誌」の存在を、11の都道府県で確認してきた。むろん、それは「墨塗り教科書」とは全く性質の異なるものである。後者は、子どもたちに軍国主義的教材にふれさせないための施策であったが、「学校日誌」はそもそも子どもたちが読むものではなく、にもかかわらず全国的に広汎な墨塗りが見られるのである。

この「墨塗り学校日誌」の問題性については、今までの研究においては全く見逃されてきたといえよう。保存期間が法定された「公文書」である「学校

日誌」が、墨で塗り潰され記述が隠蔽されたという事実は、日本の近代教育制度の中でも特異な事象であり、それは単なる記録の誤記や修正ではなく、明確な意図と文脈のもとで行われた「記録の操作」と「記述の隠蔽」としての意味をもっている。確かに、墨塗りは記述された内容を不可視化する。しかし、その墨塗りの痕跡自体が「何かがあった」という事実を可視化する。墨塗りされた記述の背後にある「記録されながらも隠蔽された教育の実態」に光を当てることは、戦争と教育の関係を新たな視点で浮かび上がらせるものである。さらには、戦後教育の出発点において遂行された重要な「記録の隠蔽と空白」として、今日までに至る根源的な探求を求めるものであろう。この隠蔽の背景と文脈を丁寧に読み解いていくことによって、日本の教育が抱える記憶の断絶、歴史認識の歪み、さらには教育者と教育制度がいかにして過去と向き合うか、あるいは向き合わなかったかの重層的な問題への照射を可能とすることになるだろう。

本コロキウムは、以上の研究課題の下に行われたが、中間報告としての位置づけをもつものである。具体的には、以下の構成のもとに進められた。

１．問題の設定　（斉藤）
　—「学校日誌」に見る戦争と墨塗られた記述—

２．栃木市第一国民学校「校務日誌」にみる戦時教育の諸相（１）
　—監護記事を中心として—　（池田）

栃木市第一国民学校の学校日誌である「校務日誌」は、児童監護に関わる日々の記事が掲載されていることが特徴である。本報告では、敗戦を挟んだ1944年度から1945年度における「監護日誌」の記事を軸として、指導に当たった教師の目に移った児童の姿と時期による変遷について読み取れることを報告した。

３．栃木市第一国民学校「校務日誌」にみる戦時教育の諸相（２）
　—戦歿兵士遺骨敬迎・武運長久祈願を中心として—　（逸見）

「校務日誌」に頻繁に記載がある戦歿兵士遺骨敬迎・武運長久祈願と在校生家族の応召状況を重ね、児童がおかれている苛烈な状況の描出を試みた。

４．８月15日の記述とその意味　（前田）

日本の学校は、８月15日をどのように迎えたのか。教師たちはその日を「学校日誌」にいかに記述したのか。終戦、敗戦、休戦、大詔渙発、聖断、平和などさまざまな言葉が飛び交う中、そこには明治以降の近代天皇制公教育の総括が隠されているのではないか。本報告では、隠れた総括にいかなる仮説が導き出せるのか、その基礎作業を試みた。

５．戦時期台湾の国民学校「学校日誌」と戦時教育の諸相　（梅野）

台湾においても日本各地の記載項目に準拠して「学校日誌」が記録され、林瑛禎（2014）、許佩賢（2025）など、戦時期および敗戦前後の記述分析（士林国民学校『学校日誌』）がみられる。本報告では、日本各地の「学校日誌」分析と対比する形で、1945年度の記述を確認できる台北、新竹、雲林の３つの国民学校「学校日誌」を例に、日本各地との共通点、相違点、台湾における記述の特色を中心に報告した。

６．「墨塗り学校日誌」の諸相　（斉藤）

「墨塗り学校日誌」に関し、墨塗りの諸相—多様さと差異—、「学校日誌」以外の墨塗り、墨塗られた文字、墨塗りの動機と背景について、これまでの調査と分析の範囲内で報告した。

７．墨塗り部分の科学的解読の試み　（森田）

記録されながらも不可視化された「墨塗り学校日誌」の記事を可視化する試みは、これまで接近できなかった事実を明らかにする可能性をもつ。本研究プロジェクトには、国立歴史民俗博物館および青山学院大学理工学部の分析光学研究者３名が参加し、①赤外域撮影、②蛍光Ｘ線による分析、③ラマン分光照射による分析等の複数のアプローチを進めてきた。本報告では、その経過を報告した。

８．指定討論者によるコメント　（小野）

９．フロアからの質疑応答

〔付記〕本報告は、2024年度～2026年度；基盤研究（B）「戦時下における『墨塗り学校日誌』の全国調査と総合的研究」に基く中間報告である。

大会参加記

教育史学会第69回大会参加記

雨宮　和輝（高崎商科大学）

2025年度、金沢の地で開催された第69回教育史学会（９月27日（土）・９月28日（日）の「大会参加記」を執筆させていただきたい。筆者は両日参加、多くを学ばせていただき、大きな研究刺激を受けた。また、懇親会にも参加させていただいた。多くの先生方と会話、研究に関する話題を共有することができたことは自分にとって非常に良い機会となった。ここでは、全ての発表・部会に参加させていただいたわけではないので、第一日目のシンポジウムと第二日目のコロキウムについてしたためさせていただきたい。

まず、第一日目のシンポジウム「大学の教養教育の歴史　―戦後大学史認識のために―」である。井上好人会員の報告は、大正期の旧制第四高等学校の『北辰会雑誌』の編集後記に着目したものであった。この旧制第四高等学校の校友会誌には様々な芸術が取り上げられており、その理解に旧制高校生の教養の所在を見ることができたというものであった。井上美香子会員の報告は、戦後の新制大学における一般教育の導入がどのように行われ、また、一般教育が大学教育に何をもたらしたのかを検討するものであった。CIE教育課高等教育部顧問として来日し、大きな役割を果たしたマッグレールが、一般教育の科目が、学生に対して未解決の問題を分析し、解決のために努力をさせる力を身に付けさせるものであるとしていた点は興味深くうかがわせていただいた。吉田会員の報告は、日本だけでなく、韓国・台湾における一般教育の導入・改革についてであった。一般教育の導入については、アメリカの一般教育課程をモデルとして導入したとされてきたが、日本からの影響も分析しつつ、類似する三ヶ国を比較することで、東アジアの高等教育モデルの在り方を探るという報告であった。御三人の報告に関して、田中会員・飯吉会員からそれぞれ質疑があった。飯吉会員の質疑では、経済界からの提言との関係について言及しており、社会が求める人材と大学での教育のあり方の関係性が議論となった。田中会員からは女性の教養教育に関する質疑があり、女子大学における教養教育に関しても討論が拡がった。今回のシンポジウムで得られた知見は、教養教育・一般教育について今一度考える上で示唆に富むものであった。

また、二日目のコロキウムでは筆者は「「専検」の研究　―制度・学力・メディア―」に参加した。コロキウムでは専検（専門学校入学者検定試験制度）に関して、多様な資料をもとに、制度・体操科・国語科・試験問題やその対策といった多面的な分析がされており、専検の実態を明確にしようとするものであった。特に、浮田会員の国語科に関する発表については、試験として出題された作品の傾向など、興味深い発表がなされていた。筆者含め参加者からも多数質疑があり、活発なコロキウムとなっていた。

今回の大会は、自身の研究に対するモチベーションを大きく刺激してくれる機会であった。各会員の御発表に敬意を表したい。

教育史学会第69回大会に参加記

宇津野　花陽（白鴎大学）

まずは、能登半島地震後の復旧・復興途上の中、そして、会場校の会員がお一人であるにもかかわらず、懇親会までを含むコロナ禍以前と同様の形式での開催にご尽力下さった金沢大学の鳥居和代実行委員長をはじめ同大学の土屋明広先生、17名の学生スタッフの皆様、大会準備委員会の中部地区の先生方、ご関係の皆様に深く感謝申し上げたい。研究発表や総会・シンポジウム等のご準備のほか、バスの増便、託児費用の補助、金沢の食文化を感じるお弁当や懇親会での食事のお手配などあらゆる面での細やかなご配慮のもと、旧制第四高等学校を感じるキャンパスで最新の教育史研究の成果から学びつつ、ご参加の皆様と交流させていただく貴重な機会となった。

研究発表では、９つの分科会のうち、第２、第６、第８分科会に参加した。自身の研究関心との関係では、第２分科会では洋裁技術の教育や女子教育について、第６、８分科会は戦後教育史について興味深くご発表をうかがい理解を深めることができた。

シンポジウムでは、「大学の教養教育の歴史―戦後大学史認識のために―」というテーマで旧制高等学校の教養教育の変遷と戦後との連続・非連続、新制大学における一般教育から教養教育への評価、一般教育の日本・韓国・台湾の国際比較についてご報告を拝聴した。

一般教育の理念としての民主社会を担う市民の育

成という考え方が戦後の日本社会においては広く理解されずイメージしづらかったこと、旧制高等学校の教養は語学が中心で新制大学の一般教養とは質的に異なるため参考にしづらかったこと、一般教養が入ることで専門教育が減ることがデメリットとして捉えられた面があること、教養を広く学ぶ中から専門を選んでいくアメリカのスタイルとは異なり、日本でははじめから専門を選んで入学するために教養科目を学ぶ動機が低く、また、教養科目と専門科目とで科目担当者が分かれていることが多いことから、大学全体として一般教養に対する共通認識を深めることが難しい状況にあることなど、教育制度上の理念と日本社会の実態や制度運用の仕組み等がうまく合わずに現在に至るまで課題が残っていることがよく分かり、大変勉強になった。

懇親会では、先生方からお話をうかがうとともに、院生会員の方も多く参加されていて若手研究者の方々との新たな出会いや交流の機会ともなった。院生時代に同じ分科会で研究発表させていただいた会員の方との嬉しい再会もあり、また次にお会いできる時まで頑張れたらと元気をいただいた。行き帰りのバスの車窓から見えた加賀百万石の歴史を感じる街並みとともに思い出に残る２日間となったことを深く感謝申し上げたい。

第69回大会に参加して

佐藤　純子（お茶の水女子大学・院生）

この夏の猛暑にすっかりやられて私は体調を崩していた。しかし、どうしても研究の最前線の発表を直接聞きたいと思い大会に参加した。

第１分科会では、1900年前後の海外留学体験や海外の教育事情と日本の教育との関係をめぐる発表が行われた。第７分科会では師範学校及び実業補習学校に関係する発表が行われた。いずれの発表も資料の精緻な分析に裏付けされていた。分科会では活発な議論が交わされ、発表者が質問を受ける度に、自らの研究をさらに掘り下げて応答する姿が印象的だった。これまでの研究が層をなして積み上げられてきていることを感じ、言葉の一つひとつの重みに圧倒された。発表者の並々ならぬ研究への情熱と、資料との出会い、それを読み込んでいく時の感動を共有できたのも大きな収穫であった。

最終日はコロキウム３の「学校日誌」に見る戦争と黒塗られた記述」に参加した。学校日誌の中の「英霊敬迎」「市葬」の記事に注目した報告では、戦時体制と当時の学校現場との密接な関係とそのリアルな姿が浮き彫りにされていた。また、戦時期台湾での学校日誌の報告では「黒塗られた記述はみられない」としつつ、「台北、新竹、雲林にあった学校日誌から戦時期の国民学校の日常と、戦時教育・戦時動員に果たした役割に視点をあて、その特色と傾向を整理する」という報告であった。台湾での資料収集に関するエピソードも印象的であった。ある情報提供者からは「学校日誌は〇〇学校にあるはず」と聞き、実際に現地に赴いたものの「ない」と言われ、それを情報提供者に伝えると「いや、絶対あるはず」と返される。このような苦労の積み重ねが研究の醍醐味であることも改めて感じた。

さらにコロキウム３では、「赤外域撮影」・「蛍光Ｘ線による分析」・「ラマン分光照射」等を用いた科学的解読による学校日誌の黒塗りの部分へのアプローチがなされているという報告があった。そしてこれらの研究は「戦後教育の出発点にて遂行された重要な「記録の隠蔽と空白」として今日までに至る根源的な探究を求めている。」と述べられていた。これら調査の今後の研究の展開が楽しみである。

今回は金沢駅から徒歩12分ほどの所に宿をとった。宿までの道すがら「旧町名復活」の碑を二箇所ほど目にした。多くの車が行きかう大通りの歩道脇からも、この地がたどってきた歴史と文化の厚みを感じた。大会の準備と運営に尽力された関係者の方々に深く感謝を申し上げます。ありがとうございました。

久しぶりの学会で・・・

新谷　恭明（九州大学名誉教授）

2020年の教育史学会大会は新型コロナウィルスによる感染症対策のためにオンライン開催となり、その後の３大会もオンライン開催となった。そして、ようやく対面で開催できるようになった2024年の大会は残念ながら福岡で別件のイベントと重なり、教育史学会への参加は断念せざるを得なかった。

オンライン大会ではなんとか研究発表の機会は保たれはしたものの、研究交流という意味では相当の消化不良を起こしていたことは否めない。僕の場合、自分の都合で昨年の大会も参加できなかったので、結果的に６年間、対面での大会にはご無沙汰していたことになる。というより、研究仲間と顔を合わせることのできなかった６年間であった。

６年は長い。久しぶりに顔を見る友人たちは一様に年輪を重ねていたし（もちろん僕もそうだが）、初

めて顔を見る会員にも多くの刺激を受けた。とある若手会員が「自分が大学院時代はずっとオンラインでした」と呟いていたのが耳に残っているのだが、その間に一つの世代が生まれたのだろうと痛感した。

金沢では1983年に大会があった。そのときは金沢大学はお城のなかにあった。当時私の赴任した九州大学教育学部は戦後しばらくして埋立地に建てられた殺風景な建物だったので非常に羨ましかったことを覚えている。確かなにかのカラオケの動画にそのキャンパスの映像が使われていて、しばらく夜遊びのたびに金沢大学を思い出されていた。

それから40数年の歳月を経ての金沢大学での教育史学会である。そのときとはちがって、移転後のキャンパスである。2003年に全国地方教育史学会を金沢大学主催で開催したが、そのときにこのキャンパスに来たかどうかの自信はない。たぶん市街地の何処かだったのではないか。早めに着いて受付を済ませた。スタッフの方々が丁寧で実直な応対をしてくれてとても気持ちのいい始まりであった。

分科会は初日は第２分科会、二日目は午前中は第５分科会、午後は外国教育史の第９分科会に参加してみた。これは個人的な関心なのだが、大正期の新教育をめぐる確執を国家権力対反国家権力、弾圧と抵抗のような二元論で見る見方は見直すべきではないかと常々考えているし、自由教育（手塚岸衛のものも、新教育全体を指す場合も）の「自由」を人間の普遍的自由と捉える見方も再検討すべきではないかと考えている。そういうところを切り開いていくのは若い知的冒険心ではないのかととある発表を聴きながら感じた次第である。

また、今大学は危機を通り越して崩壊の途を辿っていると言って過言ではない。シンポジウムはその意味で興味深かった。教育史がその任務を果たすのはこういう企画から始まるのではなかろうか、とそれぞれの登壇者から刺激を受けた。教育史全般として現状を意識した危機感を持つべきではなかろうか。

ところで、代表理事が交代することになった。新しい代表理事にはがんばってもらいたいのだが、事務局長に元の代表理事が就任すると聞いた。そういうのはあまりいいことではないと僕は思う。

最後に何かの縁かもしれないが、帰途につく小松空港のロビーでかつて金沢大学に在職していた安川哲夫さんの訃報を聞いた。安川さんは九州大学の出身であったこともあり、いくつかの思い出をともにさせていただいた。ご冥福をお祈りします。

第69回大会に参加して

中村　好甫（第一薬科大学）

昨年度に引き続き、今年度も大会に参加をすることができ、様々な研究内容を拝聴する機会に恵まれた。ご報告をなさった会員の皆様ならびに、大会運営にご尽力していただいた事務局等関係者の方々に感謝を申し上げたい。

私は、大会に参加することの意義を、自分自身の研究領域や関心に留まらない、異なる時代・地域の事象を知り、それらに関する新たな視点を得られる機会を得られることにあると考える。今年度は、コロキウム2「トランスナショナルな教育史の挑戦と可能性」に強く関心を持ち大会に参加したこともあり、コロキウムを通じて、近現代に様々な人や組織、「教育」が国境を横断していく中で、どのように価値観が付加されたのか、あるいは歪められたのかについて考える大きな機会となった。

コロキウム以外でも、今日の教育史研究において、教育の制度・思想・方法の伝播ならびにその受容というテーマが日・東・西を問わない重要な観点であるということを、今年度大会を経てより深く認識するに至った。私が出席した研究発表の第3分科会（一日目）ならびに第９分科会（二日目）は、近現代の欧米圏（イギリス、ドイツ、アメリカ）と植民地（ナイジェリア）ならびに中国を対象とした研究に関する報告部会であった。各報告は、対象とされた地域や時代は異なるが、教育的言説や取り組みがある立場の人に使用されるにあたり、その時々で使用者にとっての最適な形へと「加工」されていくその様相を捉えていたという点で共通をしていた。このように「加工」された「教育」が（特に、近現代社会において）どのように利用されてきたのか、またその過程と変遷を明らかにしていくことは、今後より一層「教育」の役割や権力性を考える上で不可欠な視点となるだろうことを各報告において実感した。そしてこうした「教育」の全体像を理解する上では、学校や教育者等に注目することに加えて、より広範に活動を支援した組織や人々の取り組み、ひいてはその伝播の流れを捉える研究が求められることを考えさせられた。

以上の点について、理解を深められたことが今年度大会に参加したことの最大の成果となった。私自身の研究についても、改めて見つめ直す契機としたい。

また、総会において報告された70周年記念誌の目

次と内容構成は、教育史ひいては歴史を「どのように捉えていくべきなのか」、「それをどのように教えることができるのか」を考える上で、とても重要な提案であると感じた。記念誌の発行がとても楽しみである。

教育史学会第69回大会に参加して

林　　潤平（京都市学校歴史博物館）

筆者は金沢大学で開催された教育史学会第69回大会に参加した。例年の大会と同様、期間中は充実したコンテンツで目白押しであったが、とくに筆者の印象に残った２つの観点から、大会に参加した所感を述べてみたい。

まず印象に残ったのが、シンポジウム「大学の教養教育の歴史―戦後大学史認識のために―」である。本シンポジウムに関し、登壇者による興味深い発表、及びその発表の随所に散りばめられた示唆に富むコメントや知見に対して、筆者が深い印象をもったことは言うまでもない。しかし、筆者はこのシンポジウムの一連の報告・議論から、同時に登壇者ならびに参加会員たちの「大学」、いわば本事業に参加した大部分の人たちが教員ならびに学生として関係する場に対する、現状及び課題認識をうかがい知ることができた点が、とくに印象に残っている。社会教育施設に身を置き、かつ学術という大学ともフィールドを共有する学芸員の職にある筆者の立場からすると、大学との協働の模索は重要な課題の一つにほかならないが、その協働をこちらの側から提案することには、同時に躊躇があることも事実である。協働の関係が両者の至らぬ点を補うところに成立するとしたら、外部の人間から見ると大学には、その点を自身で補うに足る十分なリソースがあるように映るし、そもそも大学にどのような解決を要する課題があるのか、局外者には十分に理解することができないからである。そういった観点から大学を眺める人間からみると、今回のシンポジウムであくまで「教養」というテーマに関してではあるもののを、様々な課題認識や大学の現状への問題意識の一端、つまりは対話の糸口と言えるような諸点の所在を、おぼろげながらも掴むことができたのは、とても大きな収穫となったと感じている。

また、次に印象に残ったのが、久しぶりに参加した対面での懇親会である。新型コロナウィルス感染症の影響で開催そのものが久々であったこの会であるが、こうして実際に参加してみると、改めて気がつくことも多かったと感じている。当然ながら懇親会が開かれていない期間にオンライン会議で話をする機会があった人もいるが、オンライン会議は多くが目的を定めミーティングが開かれることから、その目的に関係しない話、つまりは相手の日常の話を聞いたりする機会が減った印象があった。かたや、対面での懇親会では、その日常に話が及んだり、ノンバーバルなコミュニケーションが必然的に促進される関係で、オンラインでは得ることのできない充実した交流を行うことができたと、実際にその場に居合わせたからこそ痛感している。

終わりに、教育史学会第69回大会準備委員会並びに教育史学会事務局のみなさまのご尽力があったからこそ、筆者はこうした貴重な機会を得ることができた。ご関係のみなさまに感謝を申し上げ、筆を置くこととしたい。

初めての対面参加記

劉　　幸（北京師範大学）

2025年９月26日、北京師範大学での授業を終えた後、急いで北京国際空港へ向かい、大阪行きの飛行機に搭乗しました。大阪からサンダーバード・新幹線で金沢に着いたのは、ほぼ深夜でした。疲れはありましたが、それでもとても興奮していました。なぜなら、私にとって、初めての教育史学会大会対面参加だったからです。入会したのは、ちょうどコロナが猛威を振るっていた時期だったため、これまではオンラインでしか大会に参加したことがありませんでした。ついに対面で多くの学者の姿を拝見し、金沢兼六園の美景を目の当たりにできることは、私にとって非常に魅力的なことでした。

自分の興味のある発表が異なる分科会に分散していることが多かったため、金沢大学では小冊子をめくりながら、あちこちの分科会を駆け回っていました。最初に強い刺激を受けたのは、中野浩一先生（日本大学）の発表でした。中野先生は、ペスタロッチが教育における知・徳・体の区分を重視したのは、同時代のフランス教育の影響を受けていると指摘しました。この見解は私にとって大きな啓発となりました。これまで私はペスタロッチをドイツ（語）圏の学術的伝統からのみ理解していましたが、中野先生の発表を聞いて、自分の認識の狭さを痛感しました。平田諭治先生（筑波大学）の報告も大変印象に残りました。ドイツ留学中の白井光太郎は「発狂」しました。史料の限界から、歴史家が絶対的な歴史

の真実を見つけられないことが多いので、今日の白井の「発狂」事件に対する理解も、史料の限界に制約されていることは確かです。しかし、歴史家は特定の時代の特徴を大まかに描写することができます。平田先生の研究を通じて、当時、白井のような留学生たちがヨーロッパで感じた文化的な衝撃を大体理解できました。渡辺かよ子先生（愛知淑徳大学）の発表も大変印象に残りました。徳冨蘆花が社会主義者の幸徳秋水のために追悼演説を行った際、わざわざ井伊直弼・吉田松陰の墓のある寺社の近くを通りました。この細かい点から、歴史とは歴史そのものが連鎖していくものだと感じました。

コロキウム２を全て聴講しました。近年、「ジェンダー」と「トランスナショナル」は学界で熱い議論の的となっていますので、トランスナショナルの視点から、女性史を研究することは、より一層人々の心を打つ力があると思います。このコロキウムを通して、特に、多くの米国の教育観が同時期の日本にどのように浸透していったのかを垣間見ることができました。しかし、中国の研究者として、私なりの感想があります。日本の近代女子教育は非常に成功した「良妻賢母」の教育でした。中国近代の女子教育は一時、日本を見習い、「良妻賢母」を教育の旨としていましたが、最終的には、多くの女性が教育を受けたことで、革命家へと変わりました。私が知る限り、日本の近代史において、教育を受けたことで革命家になった女性は多くありませんでした。これは非常に重要な差異だと思います。

それはさておき、非常に充実した二日間を過ごしました。月曜日に中国へ帰る飛行機に乗るまで、兼六園を見に行くのをすっかり忘れていたことに気づかないほどでした。

撮影協力：金沢大学

代表理事退任にあたって

八鍬　友広（放送大学）

2022年から１期３年の間、代表理事を務めさせていただき、このたび退任することとなりました。この間の会員諸氏、および理事の皆様のご尽力に感謝申し上げる次第です。また、運営を実務面で支えていただいた、事務局長の小野雅章さん、事務局長補佐の宮坂朋幸さん、嘱託職員の黒後真樹さん、王暁娟さんにはとくに感謝いたします。いたって頼りない代表理事でありましたから、このように強力な事務局に支えていただかなければ、とても歩き通すことさえ難しかったと思います。

小野さんには、米田俊彦代表理事の期に引き続き、２期にわたって事務局長をお務めいただきました。まことにありがとうございます。新谷恭明代表理事の下で、私も事務局を務めたことがありますので、その大変さは身に染みて知っております。心から感謝申し上げる次第です。宮坂さんには、小野さんの補佐のみならず、代表理事の業務につきましても種々お支えいただきました。ありがとうございました。黒後さんは、私の期のみならず、長きにわたり教育史学会の嘱託職員として尽力を賜りました。この間の代表理事になりかわり、私からお礼を申し上げさせていただく次第です。黒後さんに代わり嘱託職員を務めていただいた王さんには、ICT に関わる卓越した能力を発揮され、事務局にご貢献をいただきました。感謝申し上げる次第です。

この三年間は、コロナ禍において余儀なくされてきたオンライン方式の大会運営が、コロナ禍以前の方式へと復する時期にあたっておりました。北海道大学における大会において、部分的に対面方式を取り入れていただいた後、東京学芸大学における大会では、懇親会を除いて対面に復しました。そしてこのたびの金沢大学大会では、懇親会を含むすべての行事が対面で開催され、コロナ禍以前の大会運営が、ようやく実現いたしました。と同時に、単に元に戻すのではなく、オンラインによる参加登録や、デジタル媒体での発表要綱集の配布など、コロナ禍以前にはなかった方式も定着しつつあるかと思います。対面と DX をどう組み合わせるのか、その模索は、今後も続いていくのではないかと思われます。

さて、人類史を画するとも思われる岐路が目前に迫っているように思われてなりません。この事態をどのような歴史的状況ととらえるのか、教育史学もまたその課題をつきつけられているのだと思われます。教育史学が、いかんなくその真価を発揮し、この課題に応えていくことを期待して、退任のあいさつとさせていただきます。

「専門分野の自治」を守るために

駒込　　武（京都大学）

大学の自治と学問の自由が危機に瀕しています。国立・公立・私立という設置形態により状況が異なるのはもちろん、大学によっても危機の度合いは異なりますが、すでに危機に瀕しているどころか、自治が崩壊している大学も少なくありません。国立大学の場合、2014年の学校教育法・国立大学法人法の一部改正により教授会の権限が教育研究に関する事項について学長に意見を述べることに限定され、重要事項は学長以下の役員層が決定権を握ることとなりました。大学により時期は異なりますが、この「改革」と並行して学長選考が産業界の有力者など学外者により左右される仕組みがつくられ、政府の推進する産官学連携に忠実な学長が教職員の労働環境や学生の学修環境を大きく損なう「改革」をトップダウンで決めてしまう傾向が顕著になっています。

憲法学者高柳信一は、学問の自由それ自体は市民的自由の一部であるにもかかわらず、憲法にあえてこれを記したのは、大学のように組織として学問を行うところでこそ学問の自由が侵されやすいからだと説明しました。すなわち、教員研究者は誇り高い

職人であると同時に組織の中では設置管理者の被使用人でもあり、金銭の支配力に抗しながら専門職能的自由を擁護するために学問の自由が必要なのだと説きました。また、その制度的保障として「教員人事の自主決定権」「研究教育の内容・方法・対象の自主決定権」「財政自治権」などが不可欠であると論じました（高柳信一『学問の自由』岩波書店、1983年）。

今日の大学では「財政自治権」が確立されていないのはもとより、「教員人事の自主決定権」「研究教育の内容・方法・対象の自主決定権」も危うくなっています。このような状況にあるからこそ、自律的結社としての学会活動を通じてピア・レビュー（専門家集団内部での相互評価）の原理を尊重しながら大会を開催し、機関誌・会報を刊行し、国内外の学会との研究交流を進めることが今まで以上に重要になっています。科学社会学者吉岡斉は、学会活動の意義を「専門分野の自治」という言葉で表現しました。すなわち、大学が人事権を持つのに対して、学会は専門的な学術雑誌への論文掲載を決定する権利など情報管理権を持つのであり、大学における人事が専門分野での評価を基準として行われるのは「大学の自治」の根底に「専門分野の自治」が働いていることを示すと論じています（吉岡斉『科学文明の暴走過程』海鳴社、1991年）。

専門分野の自治を守り抜くことは、大学の自治や学問の自由の崩壊をぎりぎりで押しとどめる意味を持ちます。しかも、教育史学という専門分野は、その研究対象のなかに大学・学問の歴史にかかわる省察を含んでもいます。それぞれの大学の労働・修学環境が苛酷になっているために学会活動に時間を割くのが難しいこともあるかとは思いますが、新たに代表理事に選出された者として、教育史学という専門分野の自治をなんとか維持し発展させていきたいと思います。大会で研究発表をして論文を投稿する、編集委員としてこれを審査する、大会参加記を会報に寄せる、機関誌に書評を書く、国際交流のためのイベントに参加するetc.…いずれも重要な学会活動です。会員のみなさまが、教育史学会という自律的結社にかかわる自治の担い手として意欲的に学会活動に参加されることを期待します。

第70回大会（2026年９月19～20日予定）のご案内

第70回大会準備委員会　　天野　晴子（日本女子大学）

＜ご挨拶＞　先日の第69回大会総会におきまして、第70回大会を日本女子大学目白キャンパスにおいて開催することが決定しました。日程は、2026年９月19日（土）～20日（日）の２日間を計画しており、対面による現地開催で、懇親会も実施予定です。

日本女子大学が会場校をお引き受けするのは、石川松太郎先生が本学会の代表理事をされていた1994年以来となります。個人的には、学生の時から９年間、石川先生の下で日本女子大学にあった教育史学会事務局をお手伝いさせていただきました。事務局時代の代表理事林友春先生をはじめ理事の先生方のお顔が懐かしく浮かぶとともに、当時の新進気鋭の若手研究者のみなさまが、重鎮となられ学会を見事に運営されている昨今に、本学会の歴史の重みを受け止めております。月日を経て日本女子大学にもどり、石川先生への最後のご恩返しの意味もこめて会場校をお引き受けさせていただきます次第です。

＜準備委員会＞　そのような経緯で、天野が準備委員長を務めさせていただくこととなりましたが、強力な準備委員として、日本女子大学の（五十音順）上田誠二会員、桑嶋晋平会員、齋藤慶子会員、橋本昭彦会員に加え、お隣の大学（同じ目白駅）のよしみで須田将司会員（学習院大学）もメンバーになっていただきました。

＜日本女子大学へのアクセス＞　JR、地下鉄（東京メトロ）、都電の計４駅利用可能で、どの駅からも徒歩圏内です。徒歩時間は、JR山手線「目白駅」から15分（又は都営バスで日本女子大前下車だと０分）、地下鉄副都心線「雑司が谷駅」から８分、地下鉄有楽町線「護国寺駅」から10分、都電荒川線「鬼子母神前停留場」から10分と、いずれも少し歩くことになりますが、そのかわりキャンパス内はほどよい狭さ？でほとんど歩かないのでご安心ください。

＜キャンパスの紹介＞　シンポジウム会場は、明治期の洋風学校建築で創建時のままのステンドグラスや木骨トラスが残る成瀬記念講堂を予定しています。構内には、成瀬記念館分館（旧成瀬仁蔵宅）を残しており、内部見学の交渉中です。百年館低層棟には、ハーブや季節の花々を目にすることができる空中庭園があり、高台のロケーションならではのパノラマでスカイツリーや東京タワー、東京ドーム等が一望できます。また、金沢21世紀美術館、ロレックス・ラーニングセンター(スイス)、ルーヴル・ランス（フランス）等の設計で知られる日本を代表する女性建築家・妹島和代氏によるガラス張りの図書館・百二十年館・杏彩館・青蘭館も特徴的な建物になっています。

＜キャンパス周辺＞　日本女子大学は旧田中角栄邸の真向かいにあります。徒歩圏内には、都心とは思えない緑に囲まれた歴史と文化のエリアが凝縮しています。たとえば、鬼子母神や旧宣教師館を擁する雑司が谷、丹下健三設計の東京カテドラル聖マリア大聖堂、池泉回遊式庭園を有する肥後細川庭園には細川家の学問所として使われた「松聲閣」や隣接する永青文庫、芭蕉庵が佇んでいます。その先の山縣有朋の邸宅であった椿山荘には国の有形文化財の三重塔をはじめ四季折々の風情ある庭園が広がり、神田川沿いの長い遊歩道は江戸川公園となっています。いずれも大学から歩いて行ける範囲ですので、学会前後の連休の計画に散策を加えていただいてはいかがでしょうか。

来年の第70回大会では、目白台のキャンパスに一人でも多くの会員の方々をお迎えできますことを願い、シンポジウムをはじめとする企画運営に知恵を絞っているところです。準備委員一同、心よりみなさまのご参加をお待ちしております。

『日本の教育史学』第68集における誤記のお詫びと訂正について

先般お送りいたしました『日本教育史学』第68集の書評・図書紹介において、お二人の会員のお名前の誤記という重大な誤りがございました。いずれも、入稿時・校正時の確認段階において機関誌編集委員会・書評委員会が修正できたにもかかわらず、見落としてしまいました。お名前を誤記してしまいました、西山伸会員、野々村淑子会員に対して、深くお詫び申し上げます。

誤記につきまして、以下の通り訂正させていただきます。

	（誤）		（正）
• ２頁、26行目	(1) 西**川**　伸	→	(1) 西**山**　伸
• 146頁、本文左段13行目	野々村**敏**子	→	野々村**淑**子
• 150頁、冒頭	西川　伸	→	西**山**　伸

機関誌編集委員長　坂本　紀子
書評委員長　荒井　明夫

＊図書

- 木村元『学校の戦後史　新版』岩波書店　2025/3/19
- 温秋頴『近現代日本における中国語受容史―メディア・教育・言語観』岩波書店　2025/2/27
- 前田晶子『山下徳治と日本の民間教育運動』ミネルヴァ書房　2025/3/31
- 安藤和久『学校改革としてのイエナ・プラン―ペーター・ペーターゼンの自律的教育科学の構想を訪ねて』春風社　2025/2/28
- 池田雅則 『官吏たりうる資格　判任文官と近代日本における「能力」の模索』東京大学出版会 2025/2/28
- 宮本健市郎・佐藤隆之『「よい市民」形成とアメリカの学校　革新主義期における愛国心の教育と多様性の保障』早稲田大学出版部　2025/4/10
- 原圭寛・間篠剛留・五島敦子・小野里拓・藤井翔太・原田早春・小林尚矢 訳『第二次世界大戦後のアメリカ高等教育―アメリカ高等教育史Ⅱ―』東信堂　2025/3/25
- 斉藤利彦・森川輝紀・逸見勝亮・前田一男・須田将司『「戦時教育令」の研究　天皇制公教育の崩壊過程』東京大学出版会　2025/3/31
- 西川哲矢 編著『三人の藤野先生、その生涯と交流―医家に流れる適塾の精神―』大阪大学出版会 2025/3/23
- 永島孝嗣 編著 東京都江戸川区立二之江中学校教員一同『不断の学校改革―区立中学校の挑戦21年―』麻の葉出版　2025/3/31
- 奥村旅人 著『労働学校における生の充溢：生涯教育の空間論序説』東信堂　2024/12/20
- 杉浦ちなみ『奄美シマウタと郷土教育―学ばれる「地域文化」』七月社　2025/6/20
- 石岡学 著『一〇〇年前の「入試改革」：一九二〇年代中等学校入学難問題にみる教育と選抜』勁草書房　2025/6/20
- 松井健人『大正教養主義の成立と末路―近代日本の教養幻想』晃洋書房　2025/8/1
- 京大吉田寮百年物語編集委員会 編『京大吉田寮百年物語―現役最古の学生寮がたどった歴史と寮自治―』小さ子社　2025/7/25
- 菱刈晃夫 著『メランヒトンの倫理思想―研究と翻訳―』成文堂　2025/7/20
- 小泉郁子 著　小泉郁子教育論集 第一巻 ジェンダーフリー教育　桜美林大学出版会　2023/3/25
- 小泉郁子 著　小泉郁子教育論集 第二巻 女性解放と教育　桜美林大学出版会　2023/9/25
- 小泉郁子 著　小泉郁子教育論集 第三巻 女性は動く　桜美林大学出版会　2024/3/25
- 小泉郁子 著　小泉郁子教育論集 第四巻 戦時下北京からの発信Ⅰ　桜美林大学出版会　2024/11/25
- 小泉郁子 著　小泉郁子教育論集 第五巻 戦時下北京からの発信Ⅱ　桜美林大学出版会　2025/3/25

＊紀要・ニューズレターなど

- 日本仏教教育学会『日本仏教教育学研究』第33号 日本仏教教育学会　2025/3/31
- 日本教育史学会『日本教育史学会紀要』第15巻 日本教育史学会　2025/3/25
- 教育情報回路としての教育会に関する総合的研究会（研究代表 須田将司）『近現代日本における「学び続ける教員を支えるキャリアシステムの構築」の総合的研究』報告書Ⅲ2021～2024年度科学研究費補助金（基盤研究（B））　教育情報回路としての教育会に関する総合的研究会　2025/3/25
- 玉川大学教育博物館『玉川大学教育博物紀要』第22号　玉川大学教育博物館　2025/3/31
- 大学教育学会『大学教育学会ニュースレター』No.129　大学教育学会　2025/5/9
- 京都市学校歴史博物館『博物館だより』Vol.36 京都市学校歴史博物館　2025/3
- 筑波大学人間系教育学域『筑波大学教育学系論集』第49巻第2号　筑波大学人間系教育学域　2025/3
- 大学教育学会誌編集委員会　大学教育学会誌第47巻第1号（通巻第91号）　一般社団法人大学教育学会　2025/5/23
- 名古屋大学大学院教育発達学研究科教育史研究室『教育史研究室年報』第30号　名古屋大学大学院教育発達学研究科教育史研究室　2025/3
- 日本仏教教育学会『仏教教育ニュース』No.51　日本仏教教育学会　2025/7/15

事務局からのお知らせ

１．事務局移転について

2025年12月１日より、事務局が学習院大学文学部に移転します。メールアドレスについては変更ありませんが、所在地（連絡先）は以下の通りになりますので、ご確認ください。

事務局長　米田　俊彦　　事務局長補佐　須田　将司　　事務局嘱託　王　暁娟
連絡先：〒171-8588　東京都豊島区目白１丁目５－１
学習院大学文学部教育学科　須田将司研究室気付

２．会費納入について

2025年９月１日より、第69回大会年度が始まっています。すでに『日本の教育史学』第68集の送付時に振込用紙を同封させていただいております。会費の速やかな納入に対するご協力をお願いいたします。

年会費納入には、「ゆうちょ銀行」口座からの自動引き落としが便利です。自動引き落としをご希望なさる会員には、必要書類をお送りしますので、事務局までお知らせください。自動引き落としの場合も、領収書の発行をしております。領収書が必要な場合は、事務局までお知らせください。なお、大学院学生の会員には、会費の減額を行っております（年額4000円）。手続きを行い、この制度をふるってご活用ください。

なお、2026年５月に教育史学会創立70周年記念誌『教育史研究の最前線　Ⅲ』を刊行します。2026年４月末日までに会費納入を完了されている会員に対して、記念誌１冊を６月初め頃に送付することとなっております。期日までの会費納入をお願いいたします。

３．会員登録について

住所や所属が変更になった場合には、「会員登録内容変更届」（HP の「事務局からのお願い」をクリック）に記載の上、ご提出ください。メールにても受け付けております。

謝辞：

本会報（『会報』第138号）の発行をもちまして、日本大学文理学部における事務局の業務を終えます。日本大学文理学部で教育史学会事務局をお引き受けするのは３回目になりました。第１回目は後半部分に大学院学生として、第２回目は「駆け出し」の教員として、そして今回は教員生活の締めくくりとしての事務局業務でした。事務局移転直後から、コロナウィルス感染症の影響を直接的に受け、理事会、編集委員会を含め学会運営すべてをオンラインで対応せざるを得なくなり、試行錯誤の連続でした。そのため、いろいろと行き届かぬ点が多かったと思いますが、大過なく６年の任期を終えることが出来ました。会員の皆様からのご協力に、心より感謝申し上げます。

2025年11月
学会事務局　小野　雅章

教育史学会　会報　No. 138　2025 年 11 月 25 日

編集・発行　教育史学会事務局　小野　雅章
〒156-8550　東京都世田谷区桜上水 3-25-40
日本大学文理学部教育学科
小野雅章研究室　気付
電話　03（5317）9714
電子メール　mail@kyouikushigakkai.jp
郵便振替口座　00140-0-552760　教育史学会事務局

印　　刷　城島印刷株式会社